

## 学位論文審査の要旨

学位申請者	丹羽 晶子 比較社会文化学専攻2019年度生	論文題目	19世紀フランスのバレエ評にみる女性ダンサーの描かれ方に関する研究—女性向けモード誌『ラ・シルフィード』誌(1839-1873)に着目して—
審査委員	主査: 水村 真由美 教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否: 否
	副査: 田中 琢三 准教授		「否」の場合の理由
	副査: 福本 まあや 助教		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員: 戸谷 陽子 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員: 新實 五穂 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)		<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Dance Studies)		<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
			※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

### 学位論文審査・内容の要旨

本論文の目的は、19世紀フランスの女性向けモード誌に表象された女性ダンサー像の特徴を精査し、同時期に刊行された他の新聞・雑誌における表象との比較から、女性読者に向けた女性ダンサー像を明らかにすることであった。女性を読者対象とするという記述のある19世紀のモード誌『ラ・シルフィード』誌 *La Sylphide : journal de modes, de littérature, de théâtres et de musique* (1839-1873) 及び同時期に刊行された一般向けの新聞・雑誌4紙/誌に掲載されたバレエ評を中心に考察を進めた。第一章では、19世紀のフランス女性を取り巻くジェンダー規範、身体規範、表象領域における女性の身体について概観した。当時の女性は、身体の抑圧と純潔の維持に基づく身体規範により女性の美しさの1要素とされた優雅さの獲得を目指し、身体性の希薄な「天使的女性」と官能的で身体性を強く感じさせる「悪魔的女性」の2つの異なる身体表象への分類が確認された。第二章では、1840年代の『ラ・シルフィード』誌について検討したところ、非性的で天上的、優雅さを体現する女性として描写され、性的な踊りやダンサーの官能性の言及を巧みに避けていたことが独自の視点として示された。第三章では、『ラ・シルフィード』誌上での女性オペラ歌手と女性バレエダンサーの描写を比較したところ、女性ダンサーは踊りの技術以上に優雅さが着目され、女性歌手とは異なる評価視点が認められた。第四章では、1850年代以降の『ラ・シルフィード』誌について検討したところ、バレエ評そのものが減少し、女性ダンサー描写も天上的で優雅さを強調したものから、身体性を感じさせる男性の性的欲望の対象としての女性像へと批判的に描き変えられていた。その理由としてオペラ座での新作バレエ上演の減少や男装した女性ダンサーの登用による演出や作品の変化、男性社会が求める女性像の変容が考察された。以上から、19世紀の女性向けモード誌『ラ・シルフィード』誌における女性ダンサーの描かれ方は、女性ダンサーの二面性のうち「天使的女性」の女性像に焦点を当て、特にその優雅さに評価すべきダンサー像を見出していたことが明らかとなった。これは、フランス女性を取り巻く当時の文化的背景と密接に結びついた独自の描写と考えられた。19世紀フランス社会では、女性ダンサーは舞台上の存在だけではなく、当時の女性への社会的期待や美しさの規範を反映する象徴であったことが示された。

第一回審査会では、当時のフランスの歴史的背景やバレエの歴史に関する説明、モード誌の位置付けや本研究の対象とした雑誌の選定基準、引用した文章や表にフランス語表記も併記するなどについての指摘に加え、題目も改訂の余地があるという指摘があった。第二回審査会では、前回の指摘を丁寧に修正している点が高く評価された。また題目も適切に改訂された。タイトルのモード誌の表記や資料リストの書式などに関して修正が求められた。公開発表会では、これまでの指摘を反映し、より洗練された形での論文構成や論旨が明確となった口頭発表が行われた。本論文は、19世紀フランスにおいて刊行されたモード誌『ラ・シルフィード』誌を詳細に検討した点に加えて、他紙でのバレエや女性ダンサーに関する記事や、同時期に同じ劇場で活躍したオペラ歌手に関する記事との比較を行うことにより、資料をより客観的に読み解いた点が高く評価された。また19世紀フランスという激動の時代において、女性を巡る社会文化的状況の変化を『ラ・シルフィード』誌の女性バレエダンサーの表象から分析し、バレエという舞台芸術の歴史の変遷とジェンダーの視点に立った女性像の変遷との関連を明らかにした新規性も高く評価された。

公開発表会においては、視覚的資料を巧みに用いて、博士論文の中での研究視点やその展開について、詳細かつ明瞭に口頭発表を行なった。参加者からの質問に的確かつわかりやすい言葉で答えると共に、自らの研究に対する意見や今後の展望についても、明確に述べる姿勢が確認された。本審査委員会は、本論文を博士論文としての水準に充分達していると判断し、博士(人文科学)、Ph.D. in Dance Studiesに相当するものと認めた。